

概要

2011年【古典を読む-歴史と文学-】 「いま明かされる古代XIX」

第1回 世界史の中の「国風文化」 - 列島史上の10～12世紀 -

開講日時：10/22 (土) 午後2:30～4:30

講義会場：金鷄会館(国登録有形文化財)宝形塔屋講義室

講師：愛知県立大学 日本文化学部 教授

上川 通夫(かみかわ みちお)先生

概要：平安時代中後期の文化を「国風文化」と呼ぶ常識がある。遣唐使の中止と大陸文化の相対視や、日本的な思想の表面化が関係するという。具体的には、かな文学(『古今和歌集』や『源氏物語』)、浄土信仰や末法思想、美術や風俗(阿弥陀堂、寝殿造、大和絵、三跡、十二単)などが挙げられる。この見方は、「グローバル」時代とも言われる今日の歴史認識としては、他の時代史像に比較して、日本史上で最後に残された島国的、純粹培養的な歴史像ではないかと思われる。実際には、漢族たる北宋・南宋、遊牧族たる遼・金・西夏、半島の高麗などの諸国家の動き、また貿易や産業経済の進展など、東アジア史の連動が日本史の規程要因として無視できない。しかもその中から、民衆の台頭が、生活や思想に新しい形を生んでいる。

特に仏教史を主軸として歴史をたどると、古代インドで見いだされた普遍思想の鉾脈が、12世紀日本民衆が獲得した普遍思想に形を与えたかのごとき、歴史の接点が発見される。いまだ試行錯誤の研究過程にあるが、“意志的普遍思想の世界史”といった視点で、平安時代中後期史を構想してみたい。